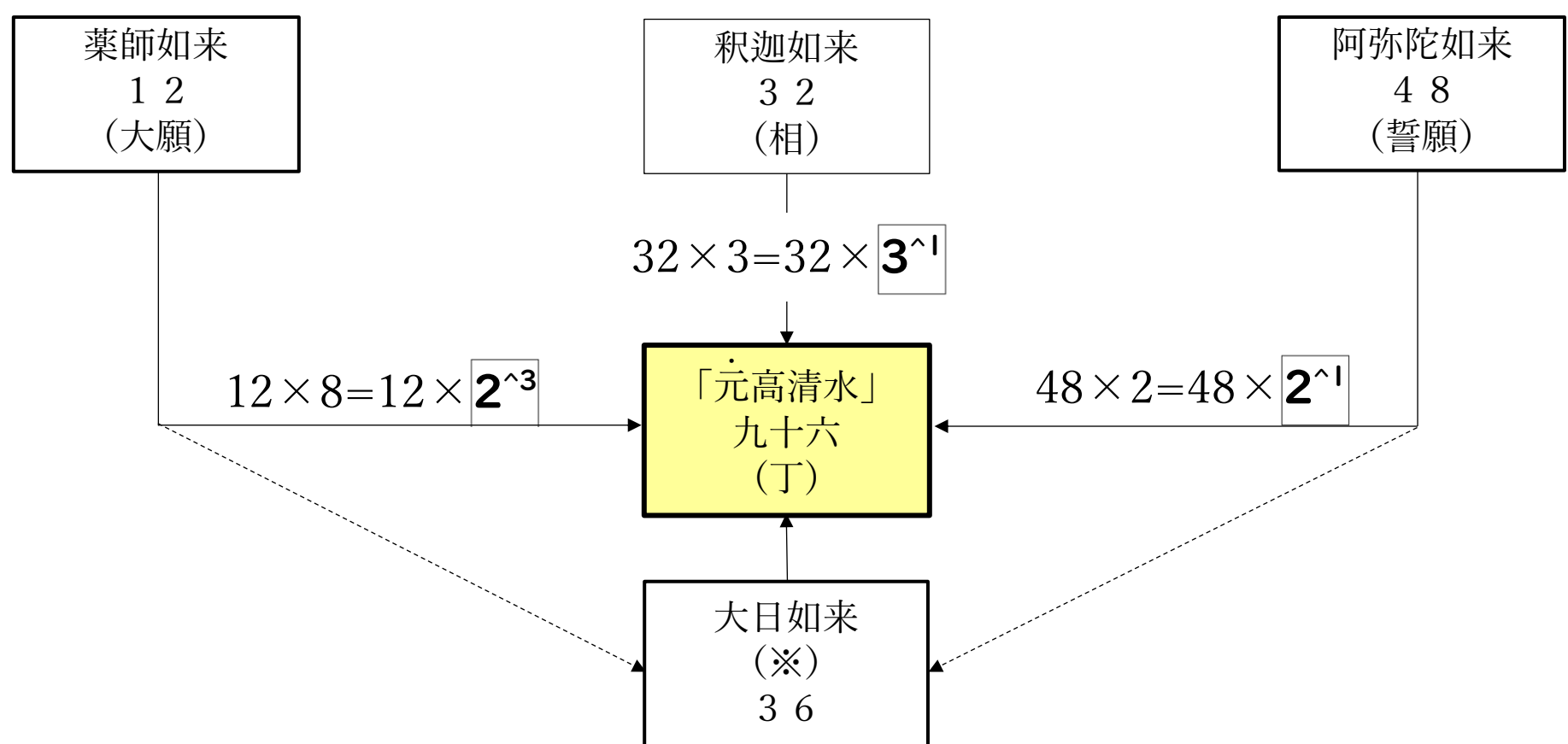


「旧跡神躰明鏡」を成した聖数

「高清水」小屋跡地（今でいう元高清水）は古来「**旧跡神躰明鏡**」（西川町史／古文書に記述）と称し、特別の地として来たが、前 43・44 頁聖数との重層性を改めて考察する。仏教開祖は言うまでもなく悟りを開き真如の世界にいる根本仏の釈迦（仏陀・釈尊）である、その仏の世界から真理を以って人間救済に表れたのが如来であり、代表格は阿弥陀如来であり、釈迦如来であり、薬師如来である、密教においてはそれらを統合した大日如来である。

釈迦の特徴は「三十二相・八十種好^{しゅごう}」と言われる。薬師如来は「十二の大願」を果たされ、阿弥陀如来は「四十八の誓願」を果たされて如来になられた、大日如来は「三十六徳目」を弟子に授け自らも果たされた。「 $12 \times 8 = 32 \times 3 = 48 \times 2 = 96$ 」の相補相関性を探る。



※の意味合いは以下のとおり。

大日如来=弥勒菩薩

みろく = 直接的； 3 6

間接的； 3 6 9

3 6 9
(+ 3) (+ 3)

$3 \ 6 \Rightarrow 3 \& 6 \rightarrow 3 + 6 = \overset{(3+6)}{9} \rightarrow 3, \ 6, \ 9 \rightarrow 3 \ 6 \ 9$ （みろく=弥勒）

2^1 （2の1乗）と 2^3 （2の3乗）と 3^1 （3の1乗）に表れた「1と2と3」は前記 43・44 頁のとおりである。1が2回、2が2回、3が2回、相互作用した、バランスが良く真に縁起も良い。なお、 $2^3 = 8$ は釈迦の「八十種好」の八でもある。

{369}は、 $\dot{3}$ （躍動基点）の万物を生む力を以って、 $\dot{6}$ と $\dot{9}$ が生まれた、これを娑婆世界に写すために、6と9を上下反転では9と6、左右反転でも同じとなる9と6に成らしめたのだ。

また、ここの墓石2体の頭部には（胎蔵界）大日如来の種子（梵字）を刻している。

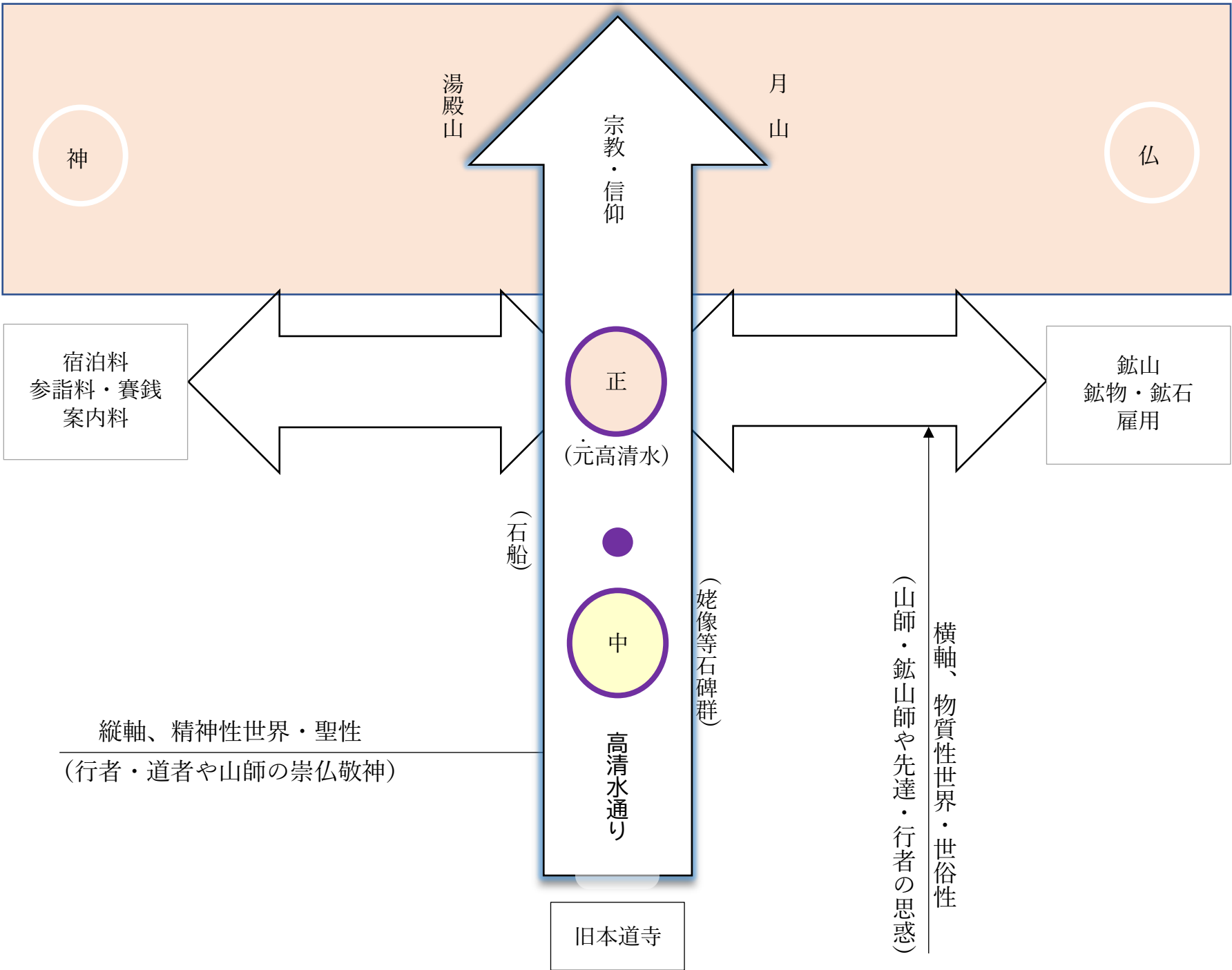
“天・地・人” 共生繁栄の道！

全体状況に鑑みて、本通りは往古より、単なる景色を眺めるためのピークハント往来道ではなく、

「人と人」、「人と自然」、「人と神^{かみ・ほとけ} 仏」の 共存共栄の道

宝冠と白衣を着用した上で往来した行者の思いに致せば、本通りは「五大に宿る魔訶不思議」の
因陀羅網^{とあみ}が投網された空間、と観念されて来たことであろう。

本通りは精神性と物質性の交差空間でもあった。		
	行者目線	山師目線
物質性世界 (見える)	宿泊料・案内料 参詣料・賽銭・初穂料 (対価・実利)	鉱山開発による金銭的利益獲得 雇用・労働市場提供 (経済・利潤)
精神性世界 (見えない)	加護・恩寵を期待した神仏への帰依・敬神崇仏 「中道正観 ^{しょうかん} 」行を燃料とした精神活動／信仰帰依の世界	



※；「中・正」は当該場所でお大師の説く「中道正観^{しょうかん}」精神の修養・陶冶を特に意識したであろうとして当てたもの。

お大師とお行様をつないだ宿坊

これも前記から繋がる世界観の事例である。下図二つの掛軸は、西川町旧本道寺（真言宗）門前集落の元宿坊「一明坊」^{いちみょう}に伝わる（所蔵の）門外不出のものである。

右は湯殿山を開基した空海こと弘法大師像の掛軸である。種々ある大師像の刷り物の中で、像の上に「湯殿山」と書かれてあるのは珍しく貴重であるとされる。左は弘法大師自らが彫刻したとある「南無阿弥陀仏」の刷り物の掛軸である。その六文字の中に三世十方諸仏を描いて、佛々混淆の廣大無辺・無窮無量の世界観を表している。

阿弥陀仏は月山大権現の本地仏であることから、湯殿山と月山を象徴する両者をバランス良く保存して来たのである、また、阿弥陀如来は密教では大日如来と一体である、お大師の根本教義「中道正観」^{しょうかん}（偏らない）にぴったり重なる。

これを題材に、お客様に対して当意即妙な語り口を以って説教・唱導・教化薫陶の絵解きを行ったことであろう。



弘法大師作云々真偽のほどを詮索しても意味がない、このような掛軸を構想し作らせた宿坊も実に大らか・大様なのだ、偏っていない、チマチマしない。共々に真に爽快なる調和感覚と統合視観、大スケール観である。



信仰上は湯殿山・お大師・大日如来は同相同価（一体）である。

○最大の特徴は、一番下の⑤には「是弘法大師之自著彫刻也（これは弘法大師が自ら彫刻したものだ）」と書いてあること。

○軸の一番上左右に「①日（本尊から見て左）」と「②月（右）」を配置している。日月を天空の両眼とし、万事万象の調和を説いている。

○「南無阿弥陀仏」の初めの文字「南」の最上位③に「阿弥陀仏」、最後の文字「仏」の頭部④に大日如来と不動明王を並置しているが、全体に平衡感覚の素晴らしさがある。

○六字名号「南無阿弥陀仏」（阿弥陀如来に帰依する）」は特に（主に）浄土宗（法然）・浄土真宗（親鸞）等で重んじられる唱え言葉のはずだが、真言密教の教主お大師様が尊重したのだ。

◎大日如来と阿弥陀如来は如来界の共同代表とする根拠の一つである。

庶民は、湯殿山が最終目的であれ、月山をも合わせて尊崇した証左の一端である。

第 III 部

～before/after に焦点～

2022(令和4)年 T-FMO活動 以前(従来)の実態

～ 地元有志の「高清水通りに対する」当時の認識 ～

下図は1983(昭和58)年9月、高清水通りを本道寺から月山へ登り湯殿山へと下った、その時に記者が同行取材した山形新聞報道(夕刊2面)、大きな紙面で3日間(9/9金、9/10土、9/12月)に亘り報道された。同図は地元の人がその新聞切り抜きと写真を合わせてパネル化したものである。



当時の西川町役場職員と地元本道寺の人達6名は**白衣に宝冠!** この姿はただごとではない、「生まれ変わる」という決意を天下に誓った印である。(果たしてどのように変わったのか。) 皆さんは大変誇らしげである。6名は地域の知識人たる知性と教養の持ち主であり、「高清水通りのことは俺が一番知っている、俺は全てを分っている」と自負・自認する立派な人達であろう。同行記者はその6名のレクチャーを受けて記事にしたのであろう。

大沼はその記事をめくり、つぶさに目を通して見た。この3回に渡る記事の中で、「高清水通りにおける史蹟に触れた処」は、9月9日(金)付け記事、下表のと通りの丁石に係る**1箇所のみ**である。

「草に埋まる石道標・・・途中『十三丁』とか、『二十六丁』とか彫られた大石が置いてある。この道は高清水通り九十八丁とも呼ばれた。」(九十八丁は昔も今もないが、何を根拠にしたのか?)

しかし、これ以降も2022(R4)6月までの39年間、調査等何も手を付けていなかった、39年間有るがままになっていた、本書のように全体的・体系的に集約したものは何もなかった、案内マップもなかった。すなわち白いキャンバス同然であった。しかし、調査探求の行動有無は価値観の有り様に係る、有るがままにして置いたことに是非・善悪を問うものではない。そのような時間的経過は至って自然な推移であった。

「高清水通り」史蹟に係る従来認識（真との齟齬）の2事例

その1

けん え おう
「懸衣翁」像ではない ⇒ 真実は「祖母神」像なのだ！

高清水通りの姥様（姥像）



湯殿山神社から月山登山道「高清水通り」という月山・湯殿山参詣道があり、多くのお行様で賑わった。

この道の33丁目にあたる場所は、標高約1000mの稜線にあり、休み場となっていた。ここには、3体の墓石のほか、2体の石像が鎮座しており、一つは姥様（奪衣婆）であり、もう一つは懸衣翁ではないかともいわれているが損傷がひどく判別できない。

ここは、聖と俗、そして女人立入の結界の地であると言われている。

図－(1)

図－(1)は「大黒森プロジェクトの歩みと『ふるさとの宝ガイドブック一覧表、H30.3.23現在』（本道地区集会センター所蔵）より拝借したもの。

説明文の一部に「・・・一つは姥様（奪衣婆）であり、もうひとつは懸衣翁ではないかともいわれているが、損傷が激しく判別できない。」とある。

なお、同センター内にパネル化したものは、今は掲示から外した。

これは、従来、尤もらしく称していた「懸衣翁」像（ジェンダー男・仏教色）ではなく、^{N o n}本調査で「祖母神」像（ジェンダー女・神道色のもの）であることを判明せしめた。

図－(1・2)の両書共に、懸衣翁だと断定した書込みではないが、一般世間（地元）の会話においては断定したかのような通説となって流布していた、なぜこうなったのか。

村山地方の奪衣婆



まるで夫婦のように並んで座っている。左の像は懸衣翁なのか？

もしれないと思うとしんみりした気持ちになってくる。ところで、奪衣婆のそばに座っているのは誰なのだろう。ひよっとしたら懸衣翁なのでは！できればそうであって欲しい。懸衣翁は全国的にも稀なのだし、私にとっては唯一の出会いなのだから。見知らぬ仏だけど、何故か身近な仏のような感じがして手を合わせた。

図－(2)

かつては月山参りの行者たちが行き交った道だ。本寺の宿坊を朝立ちして月山頂上までは八、九時間かかる道だ。今の人たちにとってはきつ過ぎてあまり通る人もいなくなった。だが往時を偲ばせるいい道である。奪衣婆は、二時間半ほど登ったブナ林の中に座っている。まるで手入れでもしているように林床植物もあり多くない綺麗な林である。

稜線に近いために奪衣婆の後ろには木々の間に明るく青い空が見える。少しも怖くない顔をした奪衣婆である。かつての賑わいを思い出しながら、その変化の激しさをしみじみと感じているのかもしれない。ここ数日間のうちに通った人がいたのであろう、金色の紙に包まれたキャンデーがある。ちよつと酸っぱいが梅飴を置いていこう。私も諦めだ。ここまで登ってくるのはもう出来ないのか

月山登山道

西川町本寺寺



図－(2)は鹿間廣治著「奪衣婆 山形のうば神」（東北企画出版）より拝借したもの。

説明文の一部に「・・・ひよっとしたら、懸衣翁なのでは！できればそうであって欲しい。」とある。



図-(3)

図-(3)は、前記中9月9日(金)分を抽出したもの。
記事の中に「・・・ 草に埋まる石^①道標・・・途中『十三丁』とか、『二十六丁』とか彫られた^②大石が置いてある。この道は高清水通り^③九十八丁とも呼ばれた。・・・」とある。

留意すべく次の3点に着目した。
一つ目は、そもそも、『丁』を刻した石は、道標（道案内に供する道しるべ）ではなく、里程標（距離標）の一種である、両者の意味は違うはず。
二つ目は、丁石 30 体の加重平均は、高さ 48(Max56)cm × 幅 28(Max38)cm × 厚さ 10(Max15)cm の自然石（川原石）である中において、相対比較の問題ではあるが、測らなくとも見た目、社会常識としては“大石”と言うのか？（言わないのではないか！）
三つ目は、“九十八丁”とは何を根拠にレクチャーしたのか？ 今となっては九十六丁が丁石終端点（最終丁石）であるものの、もちろん、九十八丁は今もないが、**昔もあろうはずがなかったのだが**。（ましてや、区切りの良い 100 丁とか、もっともらしい 108 丁はみな外れた。）

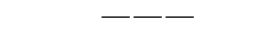


図-(4)

図-(4)は、本道寺口之宮湯殿山神社境内端にある最初の「高清水通り」道標だが、以前はこのように傍に説明板があった、その一部を抽出する
「・・・ 95丁目までの町石が設置されている。」とある。（ここでも3点が気になった。）
一つ目は“95丁”の『95』とは何を根拠にしたのか？
二つ目は“95丁目まで・・・”とあるが、ここでの丁（石）は起点からの距離地点（ピンポイント）にその印として置くものであり、『丁目』とは社会通念は面的エリアを指すことから、何の意図なのか？
三つ目は“町”とはどこから取ったのか？ 現物はみな”丁”
説明板はその後 2023（令和5）年5月10日（水）、起点記念碑の位置に移動し、（今は）『96』——5を6に上書き訂正した。

以上のような間違いを正すことが出来たのは、①文政五年建立「起点記念碑」を発見したこと、その後、②「高清水まで九十六丁（九十六体の丁石を安置した）ある」という碑文刻字を活字化・解読したこと、そのとおりに③「九十六丁(石)」を地中から発見したことの3点の結合結果である。

T－FMO 活動以後（事態は動いた、大発見の連続！）

「高清水通り」解剖結果の六大肝（六大聖柱）！						
ルート図 (本道寺から月山に至る約 15km)	拠点	(従前)	(目安)		象徴的呼称 (新規シンボリックキーワード)	象徴的現地写真
			距離	標高		
 口之宮湯殿山神社 (旧本道寺)	月山 山頂		約 14.3 km	1,984 m	月山神社本宮 おおゆきじろ [大雪城] 「 ^{しゃっきょう} 天空石橋」を (天空石堤) 新発見 “橋軸は南北、対垂直視線先に湯殿山” “設置経緯正体不明、謎の源流Gスポ” “「月山水源聖地Gスポ」歴史遺構” “月山ユートピア・ランド”中枢	
	T6	誰も気付かなかった 何もなかった	約 12.7 km	約 1,733 m	「元高清水」 「高清水小屋」跡地を新発見 『九十六丁』(石)と 墓石2体 (内1体に女性戒名) を 新発見 “丁石終端点” “古来、旧跡神舩明鏡の地” “旧本道寺奥の院”	 墓;天保二年(1831)年安置 墓;文政三年(1820)年安置  九十六丁;文政五(1822)年安置
	T5	雑木と濃い笹竹の藪 何もなかった	約 10.5 km	約 1,280 m	「柴燈場」^{さいとば}(柴明場) “真東に「烏川不動滝(不動尊)」遙拝” “西北に湯殿山、北に月山遙拝” “ 東西南北四方浄土祭祀祭儀の舞台 ” と 新解説(新価値付け)	 
	T4	見晴台であった	約 10.4 km	約 1,308 m	[石船] 寄進奉納の刻字新発見 “尾根筋山中に「舟」” “船首を湯殿山・船尾は山形 向き” “生命起源所縁聖地”	 正徳六(1716)年安置
	T3	刻字存在を想像すら 出来なかった	約 4.9 km	約 1,044 m	[姥像等石碑群] 「姥小屋」跡地を新発見 「祖母神」(像)と刻字新発見 墓石2体に女性戒名刻字新解説 “観音浄土”	 享保六(1721)年安置
	T2	「懸衣翁」像と 間違っていた	約 3.8 km	約 955 m	[起点記念碑] 文政五(1822)年建立 「従是高清水迄九十六丁處」と “九十六体”丁石奉納の 刻字新解説 “丁石始端点” 今でいう“道路原標打点地”	
	T1	刻字を活字化・解説して いなかった	起点	約 355 m		

拠点	象徴的呼称	発掘・発見を踏まえ、現地に即した歴史的価値付け・意義付けを図った	
T6	おおゆきじろ [大雪城] しゃつきょう 「天空石橋」	・2022(令和4)年9月10日(土)午前、従来ルートの安全向上対策を検討しながら下山中の宮林良幸が発見し、同行していた大沼と共に調査した。月山直下（目前）標高約 1,733m の高地、本通り「大雪城」^{おおゆきじろ}帯域旧道復元新ルート上にある。捉え方によっては「天空石堤、天空堰堤」とも言える。 ・石橋の構造は、人為的石組み、長さ約 7.5m、高さ約 1.2m、幅約 1.2mである。 ・最大の謎は、何の目的でどのような設置経緯があったのか、広く様々な関係者に聞き取りを行ったが、皆異口同音に「知らなかった、初めて見る、真相は分からない、正体不明」である。 ・架橋の向きに着目した、橋軸方向は北辰信仰に直結するようにほぼ南北、中央部に立ち軸方向に両手を広げた視線の先（ほぼ真西方向）に湯殿山が位置することを突き止めた。 ・そこで次のような祭儀の舞台と崇め祀って来たのではないかと仮説を立てた。 □A；「湯殿山（御宝前）」を拝む（観念遥拝）祈りの舞台 □B；「大雪城」を水源基点、すなわち源流部の旗印として『水神様』への感謝を捧げる祈りの舞台 □C；『水』に対する堰堤機能（洪水防止・水量調節に係る一時貯水）を託す祈りの舞台 ・総合して、「月山水源聖地Gスポ」（Gは great、スポは spot）と称する貴重な“シンボリック歴史遺構”であると価値付けを図った。	
T5	元 [元高清水] 『九十六丁』(石) 墓石2体 丁石終端点	・2022(令和4)年9月10日(土)、「天空石橋」^{しゃつきょう}発見後、下りの16時過ぎに先行していた大沼が発見し、同行していた宮林良幸と共に調査した。 ・T1起点記念碑に対応する九十六丁(石)と、予想外の墓石2体は、雑木と濃く密生した根曲り竹と腐葉土の地中下に埋もれていたものを直感で発見した、その銘文刻字を活字化・解説を図った。 ・また、当地は人為的に削平加工、平坦地を造成した状況にあり、西川町史編集資料第六号 P20 他（古文書）に出て来るが、新暦7月下旬～9月下旬の2か月間ここに賄いの2人が寝泊まりし、参詣行者を接待した「高清水小ヤ（小屋）」の跡地であることを突き止めた。 ・さらに、当地背後地（西側）に旧道ルートを発見し安全な道として復元した。	
T4	柴燈場 (柴明場)^と	・真東方角直下に、秘密裏に道を開削してまで拝みに行った不動尊を祀る烏川不動滝を、西北の方角には湯殿山を観想出来る場所であることを大沼は突き止めた。合わせて、単なる見晴台ではなく、①烏川不動滝（不動尊）遥拝、②護摩祈祷、③先祖供養柴燈、④湯殿山御宝前遥拝など、東西南北四方浄土祭祀祭儀の舞台であったことを突き止めた。 ・西川町史に出て来る古語は「柴明場」^{さいと}の呼称、明は日(陽)と月(陰)の調和的合体を意味する。	
T3	[石船] 舟型水受け	・従来、地元を含め皆は“何も刻されていない”と断定的であったが、2023(R5)年6月19日（月）午前、大黒森プロジェクトの阿部剛士さんの力を借りて動かし、大沼が碑文刻字を発見し解説した。これは正徳六（1716）年付山形八日町の丹羽氏の寄進奉納であることを突き止めた。 ・水場といえども川・河・海がなく、船とは縁もゆかりもないこの山奥の尾根筋山道になぜ、「舟」型なのか？ それは生命起源所縁聖地の印とし、祈りの舞台であったことを突き止めた。 ・設置方向は船首（舳先）を西北の湯殿山に、船尾は東南の寄進者居住地山形八日町に向けたことを突き止めた。民衆の湯殿山崇敬心を御宝前に届けんとする指向性を重ねたのであろう。	
T2	[姥像等石碑群] 「祖母神」像	・ここには墓石2体と供養碑1基、石像2体があり、その中の1体について、従来、地元を含め皆「懸衣翁」^{けんえおう}像と断定するかのようであったが、疑念を持ち続けていた大沼は2022(R4)年9月14日(水)の午前、丁寧な厚いコケ・ドロ落しによる背面調査で碑文刻字を発見し、解説の結果、神道色の「祖母神」^{そぼしん}像であること、享保六(1721)年付米沢城下の大福が寄進奉納したことを突き止めた。 ・2022(R4)年10月20日（木）大沼は、三十四丁（石）の前から東側藪の中に入り、東側に人為的削平地と人工的円形状池の水場を発見し、「姥小屋」跡地であることを突き止めた。 ・それらは三十三丁(石)と三十四丁(石)に挟まれたエリアであり、“観音浄土”と観想する霊場地に見立てられて来たことを突き止めた。	
T1	[起点記念碑] 丁石始端点	・2018(平成30)年11月15日(木)、大黒森プロジェクトの布川浩久さんがこの石碑を発見した。せっかく発見してくれたのに、地元はこの刻字を解説・吟味せずにそのままにして来た。 ・後に本通りに係った大沼は、T－FMO 立上げ後の2022(R4)年8月15日(月)に碑文刻字の活字化、解説・共有化を図った。文政五(1822)年付で建立、中央に「従是高清水迄九十六丁處」の主意と5人の氏名と「達磨寺村」の刻字があること、『高清水』という目標地点（目的地）と『九十六丁』という数を特定していることを突き止めた。 ・この解説までは、全部で九十五丁とか、九十八丁や百丁、あるいは、もっともらしい百八丁とか、はたまた月山山頂までとか、様々な声があったが、悉く打ち消された、打ち消したのだ。 ・この発見とその後の解説は、本件ものがたりを次の新たなステージに引き上げた。	

T1からT5までの間に里程標の丁石（二丁＝約109m）を九十六体寄進奉納、点在する現存30体を確認済

(end)

第 1 卷

(2)

「高清水通り 調査報告書」ダイジェスト版 補填資料

〔丁石・石碑・石像・墓石〕の碑文銘文刻字解読・活字化一覧

碑文・銘文の刻字解読に当って、こちらで読めなかった処については、村山民俗学会前事務局長の市村幸夫さんに写真データを提供し、解読に係る絶大なご協力を賜って、以下のとおり集約するに至ったものである。しかし、石碑類の現物の中には経年劣化に伴う摩滅が著しく、写真撮影の不備や判読不能のものと相俟って、何とか読めたものの正確さを欠くままに大沼の責任で記述したものもある。より正確さを求めて今後とも追求・調査を重ねて行くこととし、訂正などが生ずればフォローしていくものとする。

・・

目次的項目	
1. 文政五年建立起点記念碑	P2
2. 現存始終丁石の2体	P2
3. 現存確認済の各丁石30体一覧／2023（R5）年12月末現在	P2～P4
4. 『高清水通り』丁石のみの位置と標高（目安）	P5
5. 「姥像等石碑群」	P6～P10
6. 舟形水受け「石船」	P11
7. 「高清水小屋」跡地－今でいう「元高清水」の墓石2体	P12～P13
8. 「胎内岩」にある供養碑・墓石の一部	P14
9. （半体）地藏菩薩像	P15
10. 「禪定尼」の墓石	P15
11. その他石碑	P16
12. 道標	P17
13. 「高清水通り」沿い石碑・石塔・墓石等の年代順	P18
（文責はT－FMOメンバーの大沼香）	

1. 文政五年建立起点記念碑



文政五年 達磨寺村
 里先達 不動院
 山先達 長清坊
 後是高清水迄九十六丁處
 七月吉日 世話人
 佐藤九右衛門
 佐竹傳兵衛
 原田善兵衛

- ・文政五年＝西暦 1822 年
- ・左右両側面、背面には何も刻されていない。
- ・大きさは、高さ約 66cm、幅約 30cm、奥行約 20cm
- ・自然石（川原石？）

□後記一覧のと通りの各丁石寄進者刻字名について中山町史を追うと、96 体の全員は達磨寺村（現中山町）が所在地集落名であろうと推測している。

□5 名中、長清坊は横岫（現西川町水沢地区）、佐竹善兵衛は達磨寺村に所在していたことは判明したが、その他は諸説があり不確定である。起点記念碑はこの名主 5 名の共同寄進なのか？

2. 現存始終丁石の 2 体



現存する最初の丁(石)

寄進者名

同村

九丁 同村
 多右衛門



九十六丁 不明
 不明

現存する最終の丁(石)

(※) 総て、向かって右下には『同村』、左下にはそれぞれの寄進者名が刻字されている。

3. 現存確認済の丁石 30 体の一覧／2023 (R5) 年 12 月末現在

多右衛門(9)



善十郎(13)



十兵衛(14)○



四郎兵衛(15)



忠兵衛(16)○



曾兵衛(22)○



茂吉(23)



茂左衛門(24)



喜内(25)



太郎兵衛(27)



□郎兵衛(28)



盛之斎(29)



茂八(33)



武八(34)○



不明(48)



不明(52)



不明(56)



長二郎(59)



不明(69)



新太郎(71)



新太郎(72)○



傳七(75)



九左エ門(80)○



四郎兵衛(84)



久二郎(85)○



□七(86)



市郎兵衛(87)○



弥五兵衛(94)○



不明(95)



不明(96)○



4. 『高清水通り』丁石のみの位置と標高（目安）

位置情報の誤差や測定位置、機器やソフトの精度等の影響があり、完璧では無いことから真値と差異が生じる。

項 目 丁石地点	緯 度					經 度					標高	管理番号	
	度	分	秒			度	分	秒			(m)	全体	全数
(文政五年)起点記念碑	38	27	13	.	17	140	03	32	.	38	355	1	0
九丁	38	27	33	.	66	140	03	24	.	56	519	2	1
十三丁	38	27	43	.	74	140	03	21	.	24	591	3	2
十四丁	38	27	46	.	21	140	03	19	.	45	622	4	3
十五丁	38	27	49	.	39	140	03	18	.	9	643	5	4
十六丁	38	27	52	.	1	140	03	15	.	43	660	6	5
二十二丁	38	28	04	.	97	140	03	05	.	26	778	7	6
二十三丁	38	28	07	.	7	140	03	03	.	05	800	8	7
二十四丁	38	28	09	.	3	140	03	03	.	48	820	9	8
二十五丁	38	28	10	.	71	140	03	03	.	45	831	10	9
二十七丁	38	28	17	.	06	140	03	01	.	76	877	11	10
二十八丁	38	28	15	.	46	140	03	04	.	11	894	12	11
二十九丁	38	28	18	.	11	140	03	04	.	26	907	13	12
三十三丁	38	28	30	.	11	140	02	52	.	43	954	14	13
三十四丁	38	28	35	.	05	140	02	51	.	12	953	15	14
四十八丁	38	29	14	.	9	140	02	47	.	63	1084	16	15
五十二丁	38	29	27	.	65	140	02	48	.	45	1130	17	16
五十六丁	38	29	39	.	24	140	02	50	.	29	1158	18	17
五十九丁	38	29	48	.	25	140	02	55	.	13	1180	19	18
六十九丁	38	30	04	.	91	140	02	25	.	34	1210	20	19
七十一丁	38	30	07	.	53	140	02	20	.	68	1196	21	20
七十二丁	38	30	09	.	61	140	02	16	.	69	1203	22	21
七十五丁	38	30	19	.	06	140	02	13	.	03	1190	23	22
八十 丁	38	30	30	.	68	140	02	13	.	35	1210	24	23
八十四丁	38	30	39	.	85	140	02	10	.	66	1262	25	24
八十五丁	38	30	42	.	18	140	02	11	.	8	1271	26	25
八十六丁	38	30	45	.	42	140	02	09	.	41	1266	27	26
八十七丁	38	30	46	.	25	140	02	08	.	59	1264	28	27
九十四丁	38	31	04	.	8	140	02	20	.	71	1306	29	28
九十五丁	38	31	07	.	55	140	02	20	.	97	1293	30	29
九十六丁	38	31	10	.	85	140	02	20	.	11	1282	31	30

5. 「姥像等石碑群」

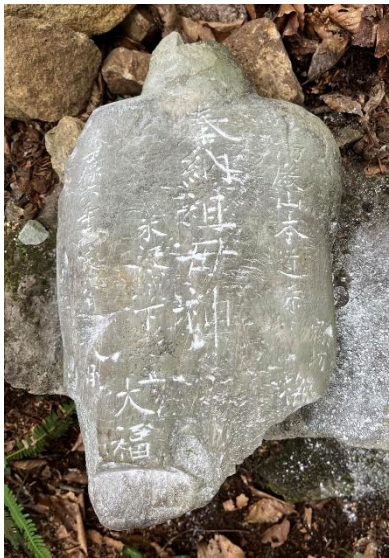


左の石像は、従来、もっともらしく噂のあった「懸衣翁」像では無く、「**祖母神**」像である。

①【正面】	大きさ等
塚辺栄蔵 行年 六十三才 明治十五年六月十三日 玉参悦道信士 織心妙悔信女 安政四巳年二月二日 同 里代 行年 三六才	頭部に墓石を象徴する円弧が刻されている
仙台亘理郡荒濱 施主 明治十六年建立 塚辺慶三郎	・・・・・・・・ 高さ 約 52cm 幅 約 38cm 奥行 約 15cm 石の材質？ 推定重量 約 89kg 台座高さ 約 16cm
①【左右側面】 刻字なし 刻字なし	・・・・・・・・ 安政四年＝1857 年 明治十五年＝1882 年 明治十六年＝1883 年

②【正面】	大きさ等
南無三十三観世音菩薩供養 寂阿道休信士 仙台邑名取長町 峯岸銀兵衛	高さ 約 63cm 幅 約 24cm 奥行 約 21cm
②【右側面】 明治二年 九月廿七日	石の材質？ 推定重量 約 95kg 台座高さ 約 11cm 明治二年＝1869 年 明治十五年＝1882 年
②【左側面】 明治十五年 午六月建立 本道寺先達 阿部秀学	 背面に刻字なし

③【正面】	大きさ等
 明治十五年旧六月十八日 弘照院天庵浄圓大姉 宮城縣亘理郡荒濱 施主 渋谷源吉	頭部に墓石を象徴する円弧が刻されている 高さ 約 62cm
 明治十六年未旧七月建立 山先導 佐藤養清	幅 約 25cm 奥行 約 22cm 石の材質？ 推定重量 約 102kg 台座高さ 約 14cm
 名取郡土崎道 渡辺吉兵衛娘 □□女	明治十五年＝1882 年 明治十六年＝1883 年 背面に刻字なし

④【正面】	④【背面・側面】	大きさ等
	四方面に刻字なし (像容からして仏教色の濃い姥様)	高さ 約 40cm 幅 約 45cm 奥行 約 29cm 石の材質？ 推定重量 約 104kg 台座高さ 約 13cm 建立年 不明 (刻字なし)
⑤【正面】		大きさ等
	正面・側面に刻字なし 「けんえおう懸衣翁」では無く、神道色の濃い神像	高さ 約 45cm 幅 約 27cm 奥行 約 14cm 石の材質？ 推定重量 約 34kg 台座高さ 約 22cm 享保六年＝1721 年 (両側面に刻字なし)
⑤【背面】	⑤【背面】	
	湯殿山 本道寺 梅(欠損) 奉納祖母神 米沢城下 大福(以下欠損) 享保六辛丑天六月初？八日	

6. 舟形水受け「石船」



元は、この刻字面は山側を向いていた。



元は、この非刻字面が谷側を向いていた。

敬	丹	住	形	施	五	丙	正	菩	縁	眷	為
白	羽	人	八	主	月	申	徳	提	無	属	六
	氏		日	山	日	年	六	也	縁	有	親

(※) 六親は、父、母、兄、弟、妻、子。
または、父、子、兄弟、夫、妻など親族
の全てを指す。

右のとおり謹んで申し上げます。(謹
んで寄進奉納致します。)

施主は山形八日町の住人「丹羽」(に
わ?)という者です。

設置(寄進)年の正徳六年は、丙申年
(西暦 1716 年)の旧暦五月(新暦六・夏
至月)です。

全ての親族縁者や家来、ならびに縁
の有る無しに係らず故人みんなの靈魂
が「悟り」を得られ成仏出来ますよう
に冥福を祈るものです。

為六親眷属
有縁無縁 菩提也
正徳六丙申年五月日
施主 山形八日町
住人 丹羽氏
敬白

全 35 文字

7. 「高清水小屋」跡地ー今でいう「元高清水」の墓石2体

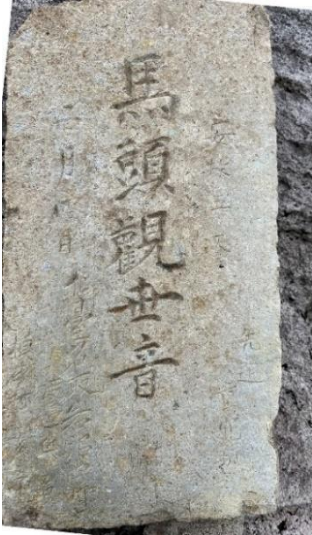
- ・「九十六丁」(石)と共に、墓石2体が濃い雑木・根曲り竹・腐葉土の地中下に埋まっていたものである。全容を明らかにした直後の写真である。台座にはローソク立て穴と、線香を横置きで焚く溝が彫られている。
- ・墓石2体の頭部には、大日如来[胎蔵界]の種子(梵字ア )が刻されている、まさしく、湯殿山信仰(真言宗皈依)の証である。
- ・刻字銘文の解説(活字化)は次頁のとおりである。一体に「蓮屋妙光信女」という女性戒名が登場する、深い意味が隠されているではないか、「月山東南エリアにおける女性戒名墓石と女人結界の係りを考察」に別記した。



①左側面  先祖代々菩提 □□□□ □□□□清□施主 (朱ベンガラ残存有り)	①正面  文政三庚辰九月 竟道栄究信士 𠬞 (朱ベンガラ残存無し)	①右側面  蓮屋妙光信女 還意浄光信士 (朱ベンガラ残存有り)	(墓石本体) 高さ 約 55cm 幅 約 25cm 奥行 約 16cm 石の材質？ 推定重量約 66kg (台座) 高さ 約 25cm 幅 約 37cm 奥行 約 9cm 文政三年 = 1820 年 (九十六丁より も古い)
②左側面  右側に何か刻しているようだが、劣化・摩滅で判読不可 施主名か？ (朱ベンガラ残存有り)	②正面  自興院禅岳栄滲居士 錦緑万□□門清成事 𠬞 (朱ベンガラ残存無し)	②右側面  天保二辛卯天 四月初四日 (朱ベンガラ残存有り)	(墓石本体) 高さ 約 57cm 幅 約 26cm 奥行 約 15cm 石の材質？ 推定重量 67kg (台座) 高さ 約 38cm 幅 約 50cm 奥行 約 13cm 天保二年 = 1831 年

8. 「胎内岩」にある供養碑・墓石の一部

高清水通り沿いにあることから取り上げる。石碑類は多数あるが、その中の一部について参考的に6基の活字化を図った、右列に女性戒名が刻された墓石3基を記載する、頭部に墓石を象徴する円弧が刻されている。



安政五天 重寛坊
馬頭観世音
二月四日 仙台名取岩沼中村
渡邊兵吉
榎原村 藤五郎



天保□



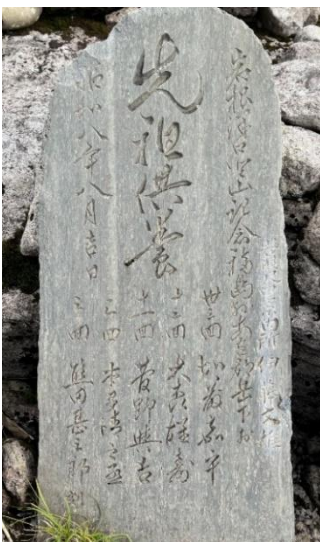
福島縣岩瀬郡浜田村前田川六□
先祖代々之供養
昭和十四年六月廿七日 阿部登米壽



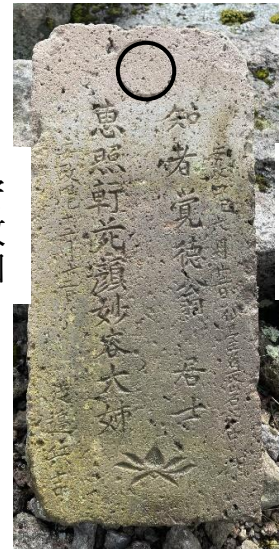
嘉永□

嘉永三

女性戒名の墓石



岩根沢口案内所 伊藤文雄
先祖供養
昭和八年八月吉日
廿三回 加藤嘉平
十三回 大森雄壽
十一回 菅野與吉
七回 本多清之丞
三回 熊田甚三郎 刻



安政四

安政四

9. (半体) 地蔵菩薩像

横道分岐目印二つこぶ岩の少し手前、高清水通り道沿いにある。対象は㊤で上半分は不明(㊤ではない)、衣の襷からして地蔵菩薩像であろう。右側には「岩根澤本道寺」と刻字されており、いわば、道しるべを兼ねていたものである、これ以外の刻字はない。なお、㊤の下半分(三分の二?)は周辺に見当たらず、墓石の欠片に見えるが、不明である。



10. 「禅定尼」の墓石

胎内岩の少し上方、月山まで約 500m の場所にある、女性修行者の墓石である。左の石碑にもびっしり刻字されているが、風化著しく、当該尼墓石の趣意碑文なのか、無関係の墓石なのかは不明である。



寛延^{かんえん}4 未年[?](西暦 1751 年)
風月妙清禅定尼
四月十五日

11. その他石碑

この2基について、虚空蔵山碑は本通りより200mくらい離れた位置にある。山神碑は本通り沿いにある。



虚空蔵山
大正十二年四月十七日
渋谷昇太建立

高さ 約70cm

幅 約53cm

奥行 約24cm

推定重量 約189kg

自然石？

大正十二年＝1923年



山神
昭和七年十月十二日
阿部竹蔵

高さ 約42cm

幅 約38cm

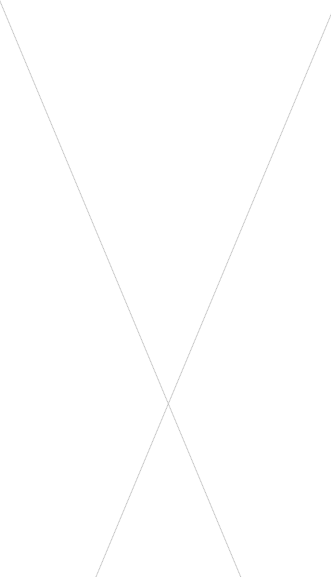
奥行 約16cm

推定重量 約54kg

自然石？

昭和七年＝1932年

12 道標

			
1 口之宮湯殿山神社境内	2 「夫婦清水」手前 林道との分岐	3 水場	4 姥像等石碑群
高さ 130cm、幅 22cm 奥行 12cm	高さ 80cm、幅 23cm 奥行 13cm	高さ 84cm、幅 24cm 奥行 13cm	高さ 74cm、幅 20cm 奥行 17cm
			
5 水場	6 水場	7 さいとば 柴明場	
高さ 71cm、幅 25cm 奥行 13cm	高さ 78cm、幅 21cm 奥行 12cm	高さ 71cm、幅 20cm 奥行 15cm	

- ✓ 設計・計画から運搬、建立までを「本道寺地区会・大黒森プロジェクト」が担った。
- ✓ 全7基を「令和2年秋」付けで建立開始、令和3年に全て設置完了した。
- ✓ 山道のきつい傾斜部分を削平しながらの小型台車に乗せた運搬は難儀であった。

13. 「高清水通り」沿い石碑・石塔・墓石等の年代順

(註)年差の基準は2025(令和5)年

――	連番	名 称	建立・設置年（和暦）	（西暦）	年差
場所 順序 （ 旧 本 道 寺 側 よ り ）	1	新道標（全7基）	令和2年から3年	2020年	3
	8	M1丁石起点記念碑(丁石96体含む)	文政五年七月	1822年	201
	9	山神碑	昭和七年十月十二日	1932年	91
	10	虚空蔵山碑	大正十二年四月十七日	1923年	100
	11	M2姥像等石碑群（墓石①）	明治十五年六月	1882年	141
	12	M2姥像等石碑群（供養碑②）	明治十六年七月	1883年	140
	13	M2姥像等石碑群（墓石③）	明治十六年	1883年	140
	14	M2姥像等石碑群（姥像）	?	?	?
	15	M2姥像等石碑群（祖母神像）	享保六年六月	1721年	302
	16	M3石船	正徳六年五月	1716年	307
	17	M5九十六丁（石）	文政五年七月	1822年	201
	18	M5高清水小屋跡地（元高清水）、墓石	文政三年九月	1820年	203
	19	M5高清水小屋跡地（元高清水）、墓石	天保二年四月四日	1831年	192
	20	（半体）地藏菩薩像	?	?	?
	21	禅定尼墓石	寛延四年四月十五日	1751年	272

――		名 称	建立・設置年（和暦）	（西暦）	年差
古 い 年 代 よ り ソ ー ト	14	M2姥像等石碑群（姥像）	?	?	?
	20	（半体）地藏菩薩像	?	?	?
	16	M3石船	正徳六年五月	1716年	307
	15	M2姥像等石碑群（祖母神像）	享保六年六月	1721年	302
	21	禅定尼墓石	寛延四年四月十五日	1751年	272
	18	M5高清水小屋跡地（元高清水）、墓石	文政三年九月	1820年	203
	8	M1丁石起点記念碑（丁石96体含む）	文政五年七月	1822年	201
	17	M5九十六丁（石）	文政五年七月	1822年	201
	19	M5高清水小屋跡地（元高清水）、墓石	天保二年四月四日	1831年	192
	11	M2姥像等石碑群（墓石①）	明治十五年六月	1882年	141
	12	M2姥像等石碑群（供養碑②）	明治十六年七月	1883年	140
	13	M2姥像等石碑群（墓石③）	明治十六年	1883年	140
	10	虚空蔵山碑	大正十二年四月十七日	1923年	100
	9	山神碑	昭和七年十月十二日	1932年	91
	1	新道標（全7基）	令和2年から3年	2020年	3

※ 尾根筋一本道の「高清水通り」に200年以上も前に寄進奉納されたものが6体も現存し、300年以上経過のものが2体もあるのだ、如何に行者から愛好されたのか、まことに深い歴史を感じる。

(end)

「高清水通り 調査報告書」ダイジェスト版 添付資料

付録（おまけ）

目 次 的 項 目	P1
[1] 「大黒森プロジェクト 10 周年記念報告＋高清水通り調査報告」 一場面	P2～P3
[2] 丁石探査過程の整理	P4～P5
[3] 注目する丁石 2 体	P6～P7
[4] 「高清水通り」を寿ぐ歌	P8～P9
[5] 「日・月・星」の共演	P10～P11
[6] 「高清水通り」調査を推進した「T－FMO」 自家発電マンマシーン渦巻活動構図	P12～P15
[7] 六十里越街道沿いの丁石（参考）	P16
[8] 羽黒山の丁石（参考）	P17～P19

（※）以下、T－FMO・大黒森プロジェクト メンバーの敬称は省略する。

[1] 「大黒森プロジェクト 10 周年記念報告+高清水通り調査報告」
一場面



於西川町交流センター『あいべ』



2023
(令和5)年 3 月 12 日(日) 発表当日



山内善信さん(本道寺在住)



大沼 香(山形市在住)



パネル展



本道寺の遺物など
調査成果パネル展

西川・有志団体

西川町本道寺の月山登山
口の一つ「本道寺口」で、



かつて栄えた月光山本道寺
(現・口之宮湯殿山神社)
の歴史を伝える「大黒森プ
ロジェクト」(阿部高之・
布施範行共同代表)が、活
動10年目を迎えた。神社敷
地内に埋もれた遺物を掘り
起こしてきた成果などを紹
介するパネル展が、同町の
交流センターあいべで開か

れている。26日まで。

月光山本道寺は江戸時代
後期に湯殿山信仰の参拝者
でにぎわった。幕末の戊辰
戦争で本堂が焼失し、明治
初期の廃仏毀釈で仏像な

大黒森プロジェクトの活動や
本道寺の歴史を紹介している
パネル展「西川町・交流セン
ターあいべ

どが壊された。74(明治7)
年に口之宮湯殿山神社とな
った。

同プロジェクトは町内外
の有志が2013年に立ち
上げ、メンバーは約30人。
展示では、生い茂る草木を
除去し石塔や墓石、弘法大
師像を運び出す様子などを
写真付きで説明している。
本年度は本道寺からの参詣
道「高清水通り」の案内マ
ップも作成し、これまで発
見した30の里程標、石碑群
の位置などが一目で分かる
ようにまとめた。

(渡部真美子)

※；3/9(木)～3/26(日)期間中のパネル展において、数多の多種多様な関連資料や歴史資料をも合史料わせて展示したが、そのほとんどが布施範行の個人所蔵である。



同年3月27日(月)撤収日

設置時の集合写真はないが、この他の人達からも協力を賜った。

[2] 丁石探查過程の整理

1. 過去には見ていた (十三・十六・二十二丁 以外はどこにいったのか?)

1983 (昭和 58) 年 9 月、山形新聞報道「お行さまの道を行く (上中下の 3 回)」の記述より	2022 (令和 4) 年 10 月 11 日火曜日 11:56 宮林からのメール受信記録より
・・・途中「十三丁」とか、「二十六丁」とか彫られた大石が置かれてある。・・・	1998 (平成 10) 年 8 月 22 日 (土) に登山したときの記録 (メモ) が見つかり、 [?] 10、 [?] 16、 [?] 19、 [?] 22、 [?] 42、 [?] 78、 [?] 82 を確認している。
しかし、その中で、2022 (令和 4) 年 11 月末現在判明したのは 13 丁である。その他の 1 体は不明である。	しかし、その中で、2022 (令和 4) 年 11 月末現在判明したのは、16 丁と 22 丁である。その他の 5 体は不明である。

1983 (昭和 58) 年から 2022 (令和 4) 年 6 月までは 39 年も時間があつた、しかし、この間は、確認した丁石についてさえも、そこにあったとしながらも、そのままになっていた。書面化整理しないままそこで止まっていた。

ところが、**39 年後の令和 4 年 7 月に T-FMO 渦巻活動が引き金となって大きく展開した。**

2. 丁石発見の経緯記録

- ・大沼が本通りに初めて入った 2022 (令和 4) 年 6 月 26 日 (日) ~ 調査最終日同年 11 月 26 日 (土) 5 か月間の丁石発見の記録は下表のとおり。
- ・なお、同年最初の発見となった「九十六丁」の前日 9 月 9 日 (金) 時点で丁石 20 体の現存を確認していた。
- ・神仏靈魂を植え込んだものであり、単なる石ころではないので単位を「体」としている。

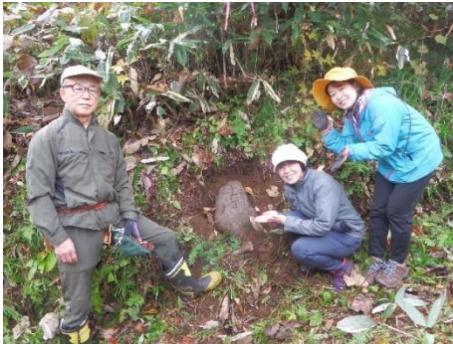
発見月日	発見丁石	発見者 (敬称略)
9 月 10 日 (土)	九十六丁の 1 体	大沼香 (宮林同行)
10 月 3 日 (月)	八十丁、八十五丁、八十七丁の 3 体	布川浩久 (阿部剛士同行)
10 月 9 日 (日)	三十四丁、九十四丁の 2 体	大沼香 (単独)
10 月 13 日 (木)	七十二丁の 1 体	大沼香 (宮林・市原同行)
10 月 26 日 (水)	二十二丁の 1 体	阿部剛士 (丁石探查イベント)
10 月 29 日 (土)	十四丁の 1 体	宮林良幸 (丁石探查イベント)
10 月 30 日 (日)	十六丁の 1 体	最上さん母娘 (丁石探查イベント)

この間の新規発見の合計数 ; 10 体

2023 (令和 5) 年 11 月末現在	総計 30 (20+10) 体の現存確認 (起点含めて 31 体) (30 体) / (96 体) × 100 ÷ 31.3% (判明率)
-----------------------	--

各丁石の GPS 位置情報 (緯度・経度) を一覧化している。

3. 2022(令和4)年度に3回実施した丁石探査イベントにおける一コマ

実施日 [発見丁石]	参加メンバー		発見時 丁石の状態	※1 探査イベント1日当り1体を発見した。 ※2 未発見の理由は、200年以上の時を経て、ルートの変更や土砂に埋もれているからであろう。 ※3 最大の懸案は「一二」(石)を発見すること。
10月26日 (水) [二十二丁] 1体				
10月29日 (土) [十四丁] 1体				
10月30日 (日) [十六丁] 1体				

〔3〕 注目する丁石 2 体

高清水通りには九十六体の丁石が寄進奉納された中で次の特筆すべき 2 点を取り上げる。

それは、**四十八丁と五十九丁**である。

前者は全数九十六丁中の半分、中間の丁石である。

後者の併せた数は「五九」（ごく）となり、「極」すなわち「極め」の意味に繋がる。

ここで、数理・聖数に係る図(表)－1 のとおりの前置きがある。

- ・ 5 は生数の極数、9 は成数の極数である。よって「五と九」は生数と成数の両方の極数である。
- ・ 5 は各生数に対し、公平・平等に働きかけて活躍し成数を生成する。
- ・ 5 は単なる中間の位置だけではなく、接着剤を担って次の発展的展開の引き金となっている。

図(表)－ 1							陰中交錯(陰中陽あり・陽中陰あり)
(※1 体)	左手・原因 しょうすう 生 数 (※3 天数・陽) 生まれたままの動かぬ数 [静的]	陽・奇	陰・偶	陽・奇	陰・偶	陽・奇	
		1	2	3	4	5	
縁	(懸け橋・接着剤、平数)	5	5	5	5	5	
(※2 用)	右手・結果 せいすう 成 数 (※4 地数・陰) 5 を得て変化躍動する数 [動的]	6	7	8	9	10	
		陰・偶	陽・奇	陰・偶	陽・奇	陰・偶	
五行 (生成順)		水	火	木	金	土	

※1・2；体と用は本体とその作用、あるいは本質とその現象をいう。

※3・4；奇数を天数、偶数を地数と整理する考えもある。

(註) 陰と陽は、対極にあることの象徴因子を指し、優劣や軽重を表すものではない。

したがって、「**五十九 (丁)**」は、**因縁果の道理で結ばれる「体と用」(例えば太陽とその光熱)の象徴であり、左右両極調和の象徴**である。なお、距離は $59 \times 109 = 6,431\text{m} \div 6\text{km}$ ほどの所にある。この 6 は陰 (偶数) の極数となる、8 ではない、陰は負の範囲では絶対値の小さい方が実質は大きいことになる。5 と 9 は偶数・奇数の陰陽で見れば両方共に奇数の陽であり、よって陽が強まり、「体と用」の関係で見れば陰陽引き合って「中正」となる。いずれにしても誠に縁起の良い丁石なのである。

ちなみに、5 月 5 日は子供の日・端午の節句、9 月 9 日は重陽・菊の節句のしきたりがあった。

図－2 は二つの丁石の存置場所である。

図－3 は「四十八丁」であるが、風化摩滅が進み刻字が読み難くなっている。

図－4 は道標「高清水」の傍に安置された「五十九丁」であり、朱色ベンガラが残っている。

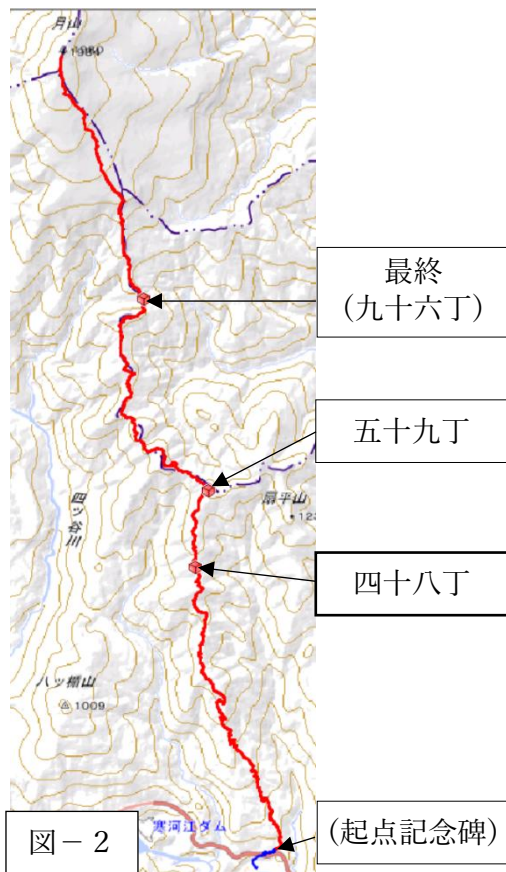


図-2



図-3

四十八丁

九十六丁四十八丁で、「四十八」は阿弥陀如来が菩薩の時に
 請願した項目数に由来するものだろうと着目しているが、現存30
 体の中で、「四十八丁」の刻字が一番不明瞭である。わざと（あえ
 て）そのような材質を選んだのか、浅く刻したのか、風化摩滅し
 たのか、どんな因縁果があるのだろうか。

今は本通りの名称と一致するこの地名を水が滴る「高清水」としているが、「高清水小屋」が掛けられた古来の「高清水」は別記しているとおり、「九十六丁」（石）が安置されている、そこを今は「元高清水」と称している。ところがいつ頃からかは定かではないが、この「五十九丁」地点を高清水と称するようになった。

このように変遷騒動に巻き込まれた因縁深い「五十九丁」は、2021(令和3)年6月30日(火)に布施範行と阿部剛士が発見したものである。

なお、意味深な「36、53、54、55」丁も記載したかったが、現存を確認出来ずにいる。



図-4



〔4〕「高清水通り」を寿ぐ歌

以下、 替え歌の詩	1	(や ま じー ほ ん どー に ち とー か み のー お し てー こ う ぼー こ う ぼー	こ ーえ て う ーじ と げ ーつ も わ ーざ は お ーさ れ う ーさ ま う ーさ ま	ひ と りー た か しー つ い でー と き にー ひ い て で ん ぎょ で ん ぎょ	ゆ け ど み ず は す ま い は げ し ひ か れ う さ ま う さ ま	主 の 手ーに い き かーた て ら しーて と き にーは た い とーう ゆ ど のーを い ん よーう	す が れーる こ こ ろーの て ら ざーれ お だ やーか ご け いーよ お ま もーり ま じ えーる	身 は やーす ま な びや ま こ とを こ う なん し こ うの つ き やま ち ょ う わの	す ーけ し) ア ー ト む ーす ぶ じ ーざ い お ーし え か ーば う か ーみ よ
--------------	---	---	--	---	---	---	---	---	--

弘法様・伝教様 陰陽交^{まじ}える調和の神よ

「高清水通り」賛歌

<日月星の星を主役に>

(※A)

御大師名付けた本道寺から
高清水通りに白衣の行者
懺悔ス滅罪六根清浄
月山・湯殿を目指して歩む

文政五年の起点の御旗
高清水までに九十六の
丁石仏に弥勒が住まう
対面その都度首頭が垂れる

(※B)

骨太尾根筋高清水道
五大が刻んだ魅惑を満載
自然の盆栽珍奇なブナや
夫婦清水、石船、子孫を繋ぐ

高台柴明場祭祀の舞台
神祇明鏡、元の高清水
大雪城下間に摩訶不思議かな
天空石橋 今、顔を出す

(※A) [原曲は星の界(よ)・星の世界／讃美歌]



つ きなきみそら に き らめくひかり
お だいしなづ け た ほ んどうじから
ぶ んせいごね ん の き てんのみは た
あ あそのほし か げ き ぼうのすが た
た かしみずど お りに は くいのぎょうじゃ
た かしみずま で に きゅ うじゅうろく の
じ んちははて な し む ぎゅうのおち に
さ んげス めつ ざ い ろ っこんしょうじょう
ちょ ういしほ と け に み ろくがすま う
い ぎそのほし か げ き わめもゆか ん
が っさんゆど の を め ざしてあゆ む
た いめん その つ ど こ うべがたれ る

(※B) [原曲は冬の星座／S 2 2 年文部省唱歌]



こ がらしとだ え て さ ゆるそらよ り
ほ ねぶとおね す じ た かしみずど う
た かだいさい と ば さ いしのぶた い
ち じゃにふり し く く すしきひか り よ
ご だいがきざ ん だ み わくをまん さ い
し んたいめい きょ う も とのたかし み ず
も のみないこ へ る し じまのなか に
し ぜんのぼん さ い ち んきなぶな や
ゆ きじろした ま に ま かふしぎか な
き らめきゆれ つ つ せ いざはめく る
み よとにいし ぶ ね し そんをつな ぐ
て んくうしゃっ きょ う い まかおをだ す

(注1)楽譜はインターネットのフリーサイトより拝借したもの (※2)楽譜直下の歌詞は原曲のもの (注3)替え歌の詩は大沼香作 2022(R4)年11月20日(日)

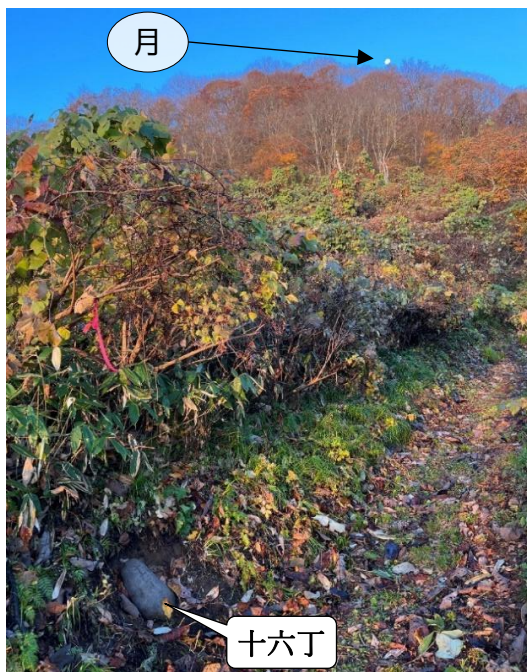
[5] 「日・月・星」の共演

月山より本通りを調査しながらの下山途中、宮林・大沼の二人は『天空石 橋』を発見し、『九十六丁』(石)を発見したその日は一日中快晴で、中秋名月の2022(令和4)年9月10(土)であった。写真は「姥像等石碑群」の手前から寒河江・天童～村山方面の夜景。月は下に見え、赤みがかった。背中を(※)北斗が見守り、遠くから太陽が語り掛けて来た。



(※) 北斗とは、北極星、または北斗七星、あるいは合せて両方、星辰ともいう。

2022(R4)年10月29(日)丁石探索イベント時に、布施親族の母娘が「十六丁」石を発見したが、それから足掛け15日目の11月12日(土)の朝、山の彼方に沈み行くお月さまを撮影したもの。入れ替わるように東からお天道様(太陽)が昇って、この付近一帯の紅葉と常緑の笹を眩しいくらいに照らした。「天(太陽と月)・地(紅葉と笹)・人(発見者と撮影者)」が一直線上に並んだ一時であった。この日12日(土)の光輝部分割合は、計算すると88.44%であった、真に縁起が良い数字が並んだ。なお、紅葉は老年者、常緑の笹は壮青年の喩えである。



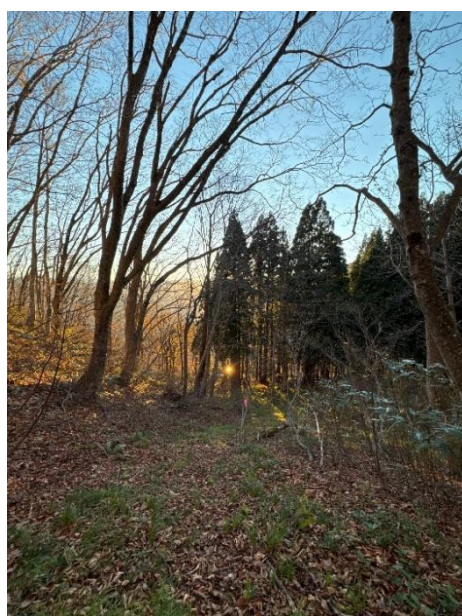
あの時の母娘が当たった十六(丁女)に
日月絡み大潮の生

(※) 海洋潮汐の干満は太陽・月・

2023 (R5) 年12月 8 日（金） 山形新聞記事

2023 (R5) /11/22 (水) 16時 3 分撮影、「高清水通り」風吹反射板下林道への下り

沈みゆく夕日が林の奥に駐車した車の屋根に反射し、縦に並ぶ二つの輝きを見ることができました。山形市上桜田3丁目の大沼香さん(74)が西川町本道寺で11月22日撮影



[6] 「高清水通り」調査を推進した「T-FMO」自家発電マンマシーン渦巻活動構図

下記3人は道普請にも大いに係り、丁石探查には他の有志の協力を賜ったが、本通り地勢・史跡等調査に特化した活動を踏まえた「高清水通り案内マップ」編集・作製等に直接従事枠組み部分を「T-FMO（調査隊）」としたものである。

- 少子高齢化の社会にあって、現実的に、地域コミュニティを中心的にけん引しているのは年寄りだ、年寄りが頑張らざるを得ない現実の社会である。この情勢下、本道寺・月岡集落の、合せても30世帯にも至らない小さな小さい限界集落の70歳を超えた2人の爺と、よそ者の70歳を超えた爺の3人の「T-FMO」自家発電ハイブリットマンマシーンがうなりを上げ、一時“地域興し”に投じた活動である。“少し変わった地域興しの新モデル”と自負している。
- なぜ、このような心地良い渦巻活動になったのか？ しがらみや腐れ縁を作らないという自覚を踏まえ、向上心や悔しさを燃料とする自家発電マンマシーンに成ったからである。
 - ✓ 一時期、地域興しに必要とされた「よそ者・若者・バカ者」のキーワードは使われなくなったが、その心は今も十分に意義がある、その精神が自発・自動結集したのであった。
 - ✓ 飲み会や仲間活動で「政治・宗教・スポーツ」の話題はタブーというが、そのような迷信に捉われず何事も開放的に対話した。
- 一般的に、大小を問わず、2名上の集団にはトップ（リーダー）とピラミッド構図の在来型指揮命令統制機能が自生する、しかし、自生しなかった、ここには職務権限の権能作用を生成させなかった、それがかえって奏功したのだ。（大沼は特に権能差配を嫌った。）
- 空海の言う「異生羝羊心」、すなわち「マンキタゲ佞奸根性（いい歳になってもひねくれたねたみ・ひがみ、ねじ曲がった自尊心）」の者がメンバーにいないれば、各人の個性が燦然と光輝を放つ「チーム」に変貌するのだ。（一人でも権威屋・独善屋がいるとチームワークは瓦解する）

1. 調査を担った「高清水通り調査隊（T-FMO）」の立上げと名付け

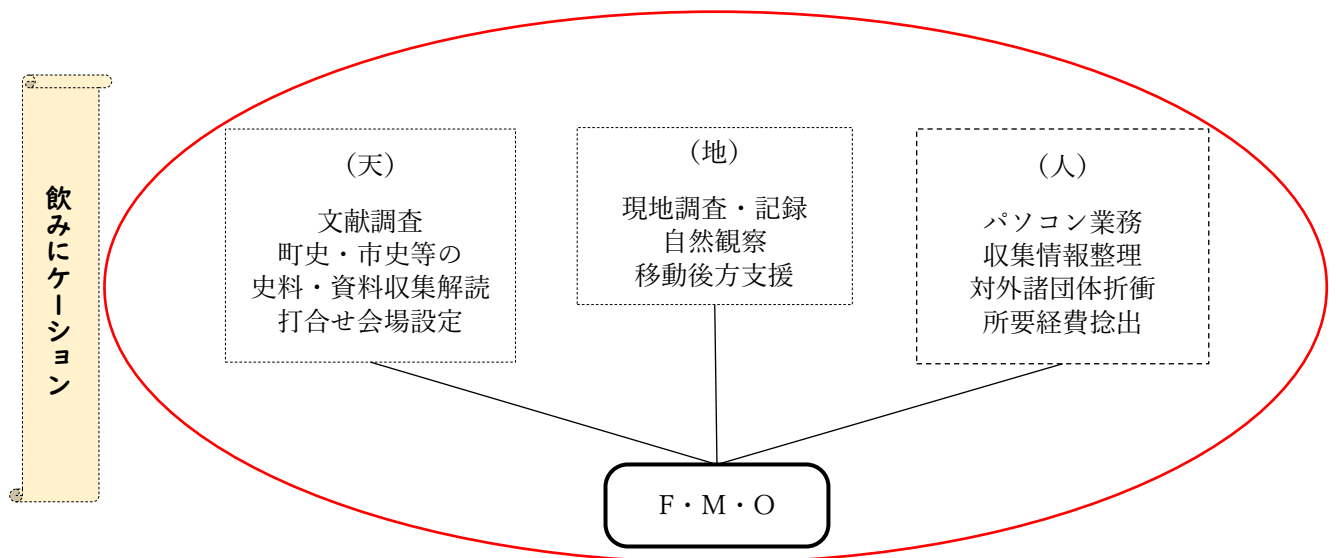
2022（令和4）年7月24日（日）3人が初会合、その心は、それぞれは小さな微生物のような目立たぬものではあるが、心の内に秘めた幻想曲——形式にとらわれず、作者が自由に楽想を展開させて創る曲——様相をオーケストラ風の熱い心を以って取り組んだのがこの一連の渦巻活動であった。

3 人				次元転換再築構成	
布施 範行 の	宮林 良幸 の	大沼 香の		F は	ファンタジー fantasy（幻想曲）
				M は	ミトコンドリア mitochondria （ヒト細胞内最微小エネルギー発生源）
				O は	オーケストラ orchestra（交響楽団）

『T』は「高清水通り」のT、Triangle（3人組）のT、Total（総合）のTである。

2. T-FMO 各自の自主行動

□地域行政（町内会等）から正式認知されたグループでは無い □規約的な内部ルールを定め無い。 □責任者（リーダー・代表者）をあえて決め無い □役割分担や担当を決め無い。 □やるべき業務は各自みな認識した・自発した、自らの判断で自らが意気を感じて動いた、主客の相互転換自由展開とした。 □各自が持つ「得意・得手・技」（個性）発揮を丸ごと相互尊重した。 □始終、総てにわたって提案型姿勢（心のブレインストーミング）に徹した。 □無心、無我夢中（利害損得の勘定・感情は微塵も有らず）になった。	世の一般常識、既成概念とは違う
---	-----------------



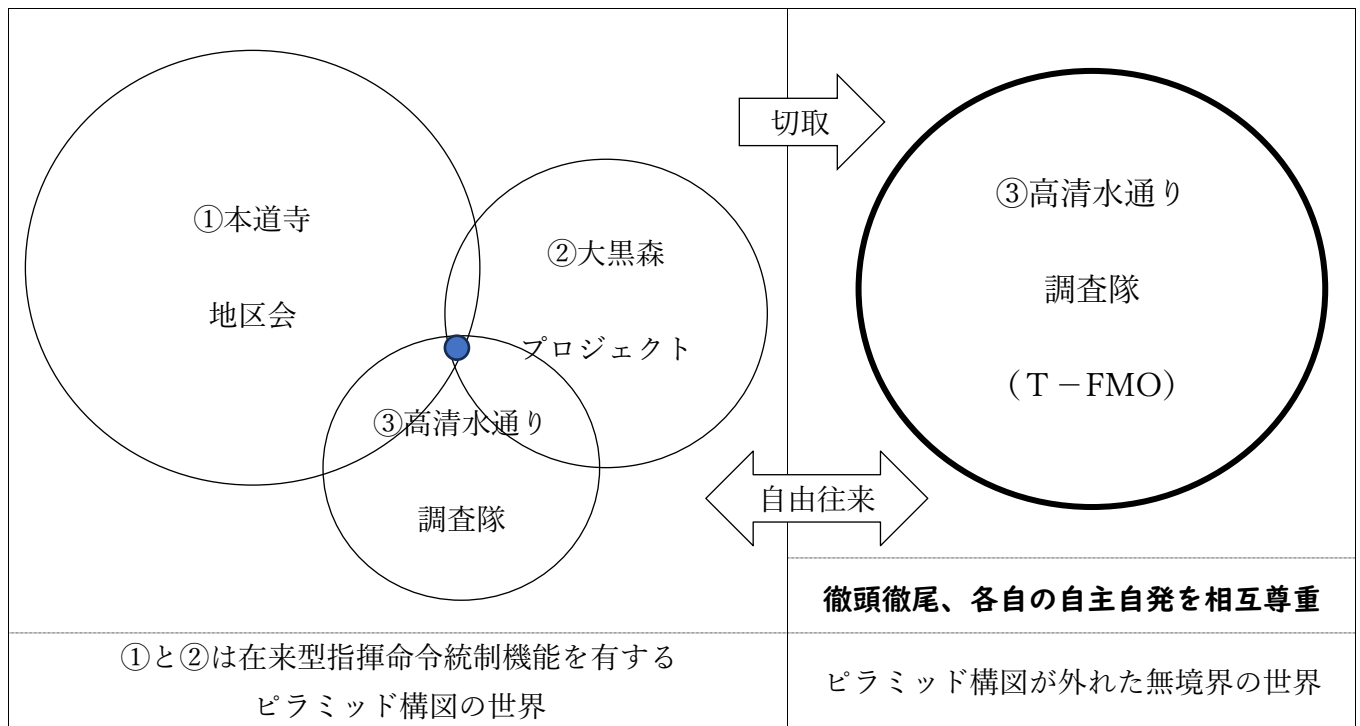
3. 「高清水通り調査隊（T-FMO）」の位置付け

次頁図、③本件「高清水通り」の地勢・史跡等の調査を目的とした有志チーム「高清水通り調査隊」に関する組織団体は、①6集落・5町内会の集合団体である本道寺地区会、②口之宮湯殿山神社境内に眠る石仏等遺跡の発掘調査を目的とした任意活動組織の「大黒森プロジェクト」であり、その連携イメージは次頁左図のとおりである。

ただ、「高清水通り調査隊」の実勢・実体はあくまでも独立し、調査に特化した本件活動を展開した。

①・②とは、案内マップ作製とパネル作製に係る費用手当の面や外部団体との情報交換の観点、所属が重なる人もいることから連携を図ったものである。布施さんと宮林さんは①②③に所属し、大沼は①・②いずれの組織にも加入せずよそ者で③のみの所属である。

必要に応じて立場を自在に行き来した。立場の往来は、行動の自由度と思考柔軟性確保を担保する臨機応変を意図したものである。



「切取・自由往来」とは、「時・処・位」「T・P・O」に応じて柔軟に適時適切なポジションを取ったこと、この動きを矛盾・自家撞着としない。(従来型の固定観念・既成概念では解けない?!)

4. 生み出した成果

①本道寺地区会と②大黒森プロジェクトとの緊密な連携のもとに以下の成果を齎すことが出来た。

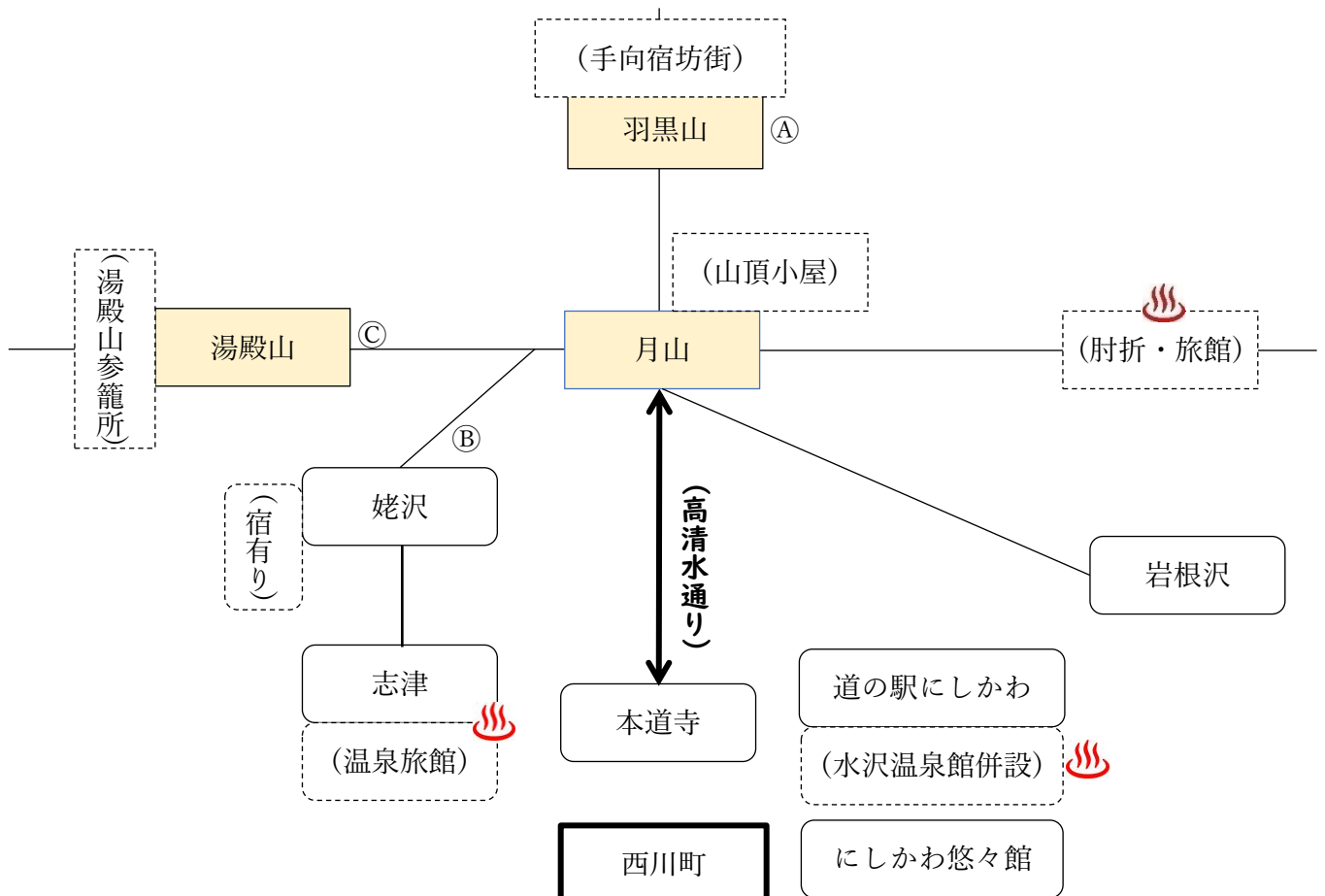
活動成果の集約	2023 年補完
2022(R4)年 7 月～2023(R5)年 3 月までの 9 か月の短期間で 次の大きな四つの成果を成した ✓1 「高清水通り 案内マップ」作製・一般配布 ✓2 調査パネル作製・展示、於「※あいべ」・2023(R5)/3/9(木)～3/26(日) ✓3 調査活動を報告発表、2023(R5)/3/12(日)、於「※あいべ」 ✓4 「高清水通り調査報告書」ダイジェスト版の作成、公開、配布、随時更新 ※1；「あいべ」とは西川町の西川交流センターをいう。 ※2；他に「高清水通り調査報告書」(細部の記録文書)作成中	ダイジェスト版 マップに掲載 2023 (R5) 年 9/26 (火) 西川町デジタル
✓本道寺地区会や町内会、「大黒森プロジェクト」等既存組織の承認・決定を得たものではない。従来型に捉われない「少し変わった地域興しのかたち」のモデルとなったものである。 ◎「報・連・相」を徹底した、すなわち、あらゆる「もの・こと」に対し、自由に“口はさみ”OKとした。	だからこそうまくいった (世の一般常識とは逆)

5. 計画性を意識した段階的取組み

縦軸（時間軸）要素の中にも、横軸（拡散志向）展開を意識して、下表のステップを描き、地域振興に助力したく明確な意図を以って計画的に取り組んだ。しかし、硬直化せず柔軟にローリングプランを以って推進した。

第Ⅰステップ	三現（現場・現物・現実）主義 徹底に基づく体験智の展開	道に潜む“不思議と謎”を調査し 新しい視点からの歴史的価値を意義付けて 白日の下に晒す
第Ⅱステップ	書面化、開示・公開・公表	上記の四つの成果
第Ⅲステップ	利活用・応用・敷衍化	- 活動キョッチコピーを設定 “西川町にもう一つの誘客ゾーン ^{プラスワン} + 1！” “高清水通りの新たな魅力発掘と情報発信” - 西川町 HP「みんなでつくるデジタルマップ」 に掲載 - 報道機関への情報提供

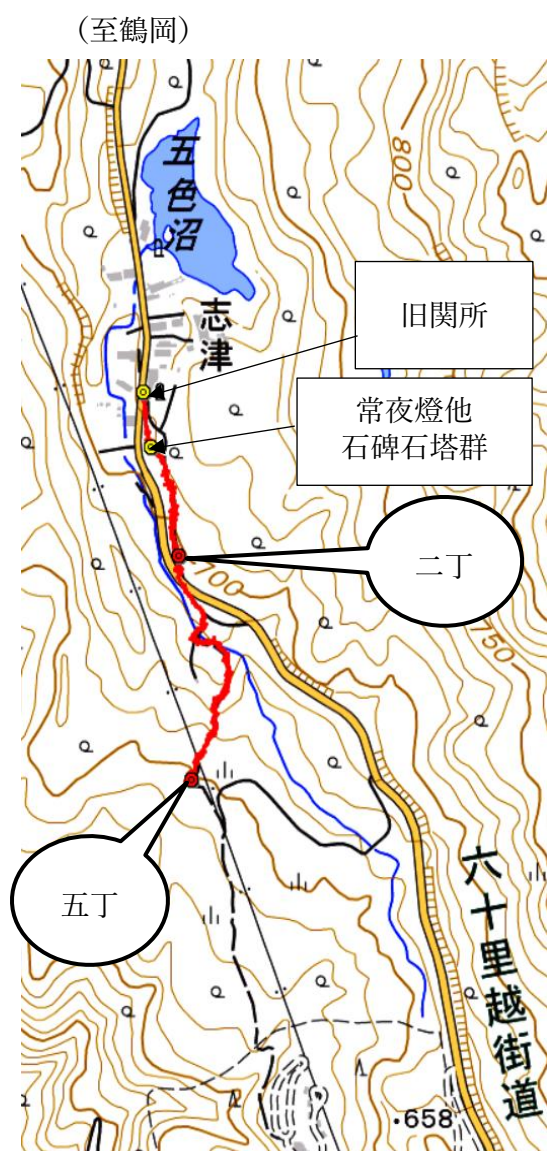
西川町において、登山客・アウトドア志向派に対応する地区は、朝日連峰の麓大井沢地区と、月山の麓志津温泉・姥沢地区、本道寺・岩根沢地区であろうが、月山に着目すると、下図のような登山ルート（概略）がある中で、①・②・③がメジャーと言える。しかし、高清水通り調査活動半ばにおいて、そのメジャールートに「高清水通り」の楔を打ち、西川町観光開発に大いに貢献したいと念願するようになった。このような日本百名山「月山」への登山道がある中において、専用・特化した案内マップを公のものとして作製したことは、「高清水通り」が初めてであろうと思う。



〔7〕 六十里越街道沿いの丁石（参考）

2023(令和5)年8月10日(木)現地調査を行った。高清水通り丁石と類似のものが、六十里越街道西川町志津地内に安置されていることから、話題ツールの一つとして参考的に記述する。

- ・現在2体のみを確認している。全部でいくつなのか、経緯・由緒は不明である。
- ・昔設置していた旧志津関所、あるいは常夜燈を起点としていたのか、ここは、^(註)山から里へ向けて、つまりは山形方面に向けて安置した模様である。他の歴史古道においては、里から峠に向けて、登りきって峠から里に向けて設置したものがある、基点をどこに置くかであり、この例は何も珍しいことではない。(註)二丁は東側斜面に、五丁は道の中央部にあり下って順に見える。それにしても間隔は不釣り合いだが？



(至山形)



「二丁」



「五丁」

登ると逆さに見える。

[8] 羽黒山の丁石（参考）

2023(令和5)年5月10日(水)現地調査を行った。高清水通り丁石と類似のものが、羽黒山杉並木石段参道沿いに、随神門から羽黒山頂三神合祭殿手前の鳥居（最後）まで約2kmの表参道（石段）に18体（起点・終点+16体=18体）安置されている。大沼は15体確認済。

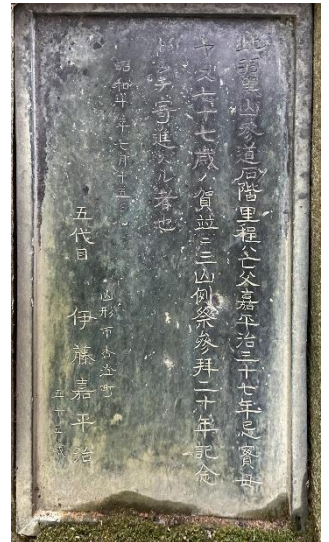
話題ツールの一つとして参考的に記述する。（以下の写真は、大沼が撮影）



随神門から杉並木石段へ



起点記念碑



同左銘文



随神門から降りて右クランクの左角に「壺（一）丁」



途中の「七丁」と石段



最後の鳥居



左記鳥居を潜った直後右手

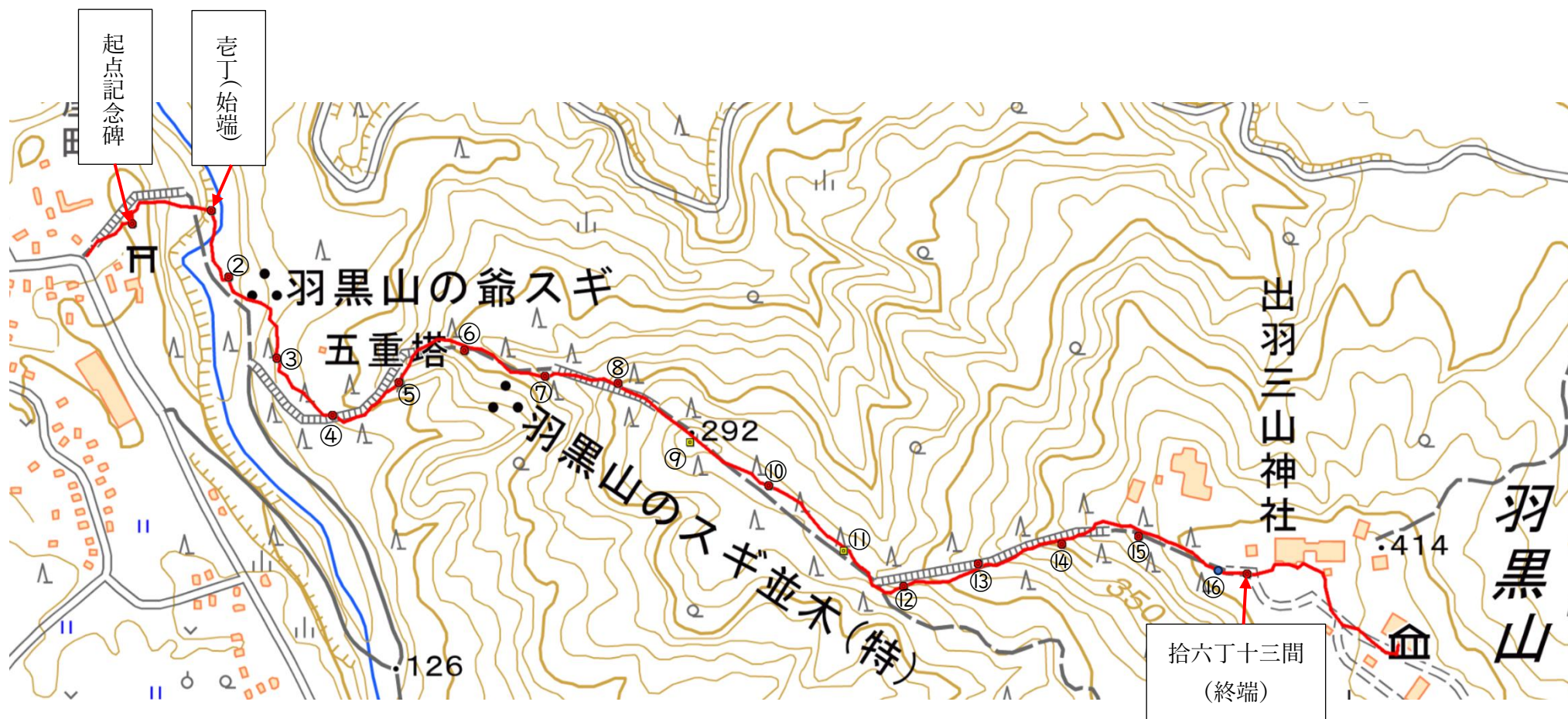


「終点 拾六丁十三間」

羽黒山参道沿い丁石一覧

	一丁(壹)		二丁(貳)		三丁
	四丁		五丁		六丁
	七丁		八丁		十丁
	十二丁		十三丁		十四丁
	十五丁		終点拾六丁十三間	(未確認)	
				九丁	十二丁
				十六丁	

- ・高清水通りと同じ自然石の様だがよりごっつい。同通り丁石大ききの平均は高さ 48cm・幅 28cm・厚さ 10cm ほどであるが、ここのものは約 1.3 倍大きい。
- ・下図は GPS トラックログ（足跡）と丁石の位置である。この調査においては九丁と十一丁と十六丁は（未確認）見逃している。
- ・「高清水通り」の特徴は何といっても「九十六」体という数の多さである。



(end)

おわりに（全部まとめて最後に）

最後の最後に書き置くことがあります、文責を担うものの編集後記です。

私が初めて「高清水通り」に入ったのは、六十里越街道ウォーキングで知り合っていた布施範行さんからの声掛けで、2022(令和2)年6月26日(日)でした。そして、後日7月24日(日)に宮林良幸さんを紹介され、3人が初会合を持ったのであります。いわば「高清水通り調査隊」(T-FMO)の立上です。これ以後に本通りの地勢・史跡等調査の事態が大きく動いたのです。

足を運ぶ度に神秘と不思議、謎と魔物に遭遇です。その空間に清流する靈気に巻かれるままにどンドン引き込まれて行きました。“この道には何か眠っている！”自生・自発する好奇心の赴くままに取り組んで来ました。

さて、弘法大師こと空海は、大同4(西暦809)丑年4月8日湯殿山を開山開基し、引き続き大師は同年8月8日に山号寺号を「月光山光明院」と名付けて旧本道寺を開基しました。それ以来、地元の数多の人達が月山および湯殿山を目指し本通りに幾度となく入ったことでしょう。中には必ずや自称歴史家がいるはず、「我こそは郷土史家」がいたことでしょう。そうすれば、本通り沿いに点在する丁石や石碑類に強い関心を寄せたはずですが・・・。

その時の対応は次の三分岐のいずれかになりますが、私(達)は素直に迷いなく④の道を選択しました、だから、当たり前のことを実践したに過ぎないことなのです。

- | |
|--|
| ④今直ぐ、徹底的に探求し書面化しよう。
⑤そのうち、調べよう。
⑥いや、意味ないは(変心)。 |
|--|

人生にとって、地域にとってどれが正しいのかという是非・善悪を問うことではありません。人それぞれの価値観で優先順位を見極めて動くものであります。どんな対応を取ろうがその選択に優劣はありませんし、どうしろとは憲法には書かれていません、しかし、従来は、今まではどうしたのか、どうしていたのか・・・。

様々に記述している中で、発見年月日と氏名を明示している、とりわけ「大沼(〇〇)が発見した」と自慢げに執拗に徹底して書いているが、「発見した」という事実をしっかりと記録しておく意図からであります。その時の強力なデジタル証拠を私は全部持ち合わせております。「カシミール3dスーパー地形セット／開発者DAN杉本氏」ソフト(有料)で記録したGPSデジタル記録——トラックログ(足跡打点、その年月日・時刻・緯度経度の位置情報・標高)を保存しています。そして、Apple社製「iPhone 13 mini」で撮影した写真を持ち合わせています。この二つを持って、国土地理院地形図上において撮影地点と撮影方角を以ってリンク表示(アナログ表示)出来るのです。

2022(令和4)年が過ぎ、翌年のまもなく1年になろうとする目前の2023(令和5)年6月19日(月)に「石船」の刻字碑文を新規発見し、2023(R5)年8月29日(火)に「天空石^{しゃつきょう}橋」の向きの意味合いを探り、2023(R5)年9月11日(月)月山頂上小屋管理人の芳賀竹志さんからの案内を賜り、「月山・湯殿山追分碑」に出会うことが適ったのを以って、この間に私が問題意識を持って来

た課題・主要懸案を総て解決出来たことから一旦区切りとするものであります。

私の大きな問題意識は、本通りに関して本活動のように、速やかに開示・公開の有りや否やの姿勢であります。その上で、本件活動の最大の特徴は、顕著な成果は、本通りの地勢・史跡等調査活動の結果（諸データ）を書面化、共有化・一般公表したことにあります。このような本通りに係る可視化は、^{ティー エフモ} T-FMOが初めのことであると自負しています。本調査結果について一片たりとも個人所有物的に秘匿・隠避しておりません、そんな意図はさらさらありません。なぜならば、高清水通りは、出羽三山は、個人やどこかの地域の所有物ではありません、本通りに残された史跡は古人が真剣に取り組んだ利他行・喜捨行結実の印です。みんなの、国民の貴重な歴史財産です。

私は新規発見の大部分に係ったが、“見付けた”だけで終われば “そこにもものがあるだけ” に等しく意味を成しません、あるがままに時間が経過するだけであるでしょう。

しかし、あるがままにせずに、歴史的背景事情をも考察しつつ意義付けを図り、共有すればこそ価値が生まれます。このような纏めに至ったのは布施さんと宮林さんと共に、対等互啓（恵）精神で動いたT-FMOの成果であると矜持を抱いています。この二人に刺激され阿頼耶識から自噴して来る不思議な使命感に引き摺られるままに、本通りの魅力にのめり込むままに一意専心本件活動に係ったことをとても嬉しく思っています。

行動を伴った調査記録に係る部分は当然ながら事実に沿う前提ですが、史跡に関する解釈面については書き手（大沼）の個人的な所見が入っています。例えば300年も前の石碑を設置した時の趣意・経過を書いたその当時の正真の記録文書がなければ、今世の人が書くことにおいては想像する他はありません。一つの「もの・こと」に対して無数の見方があるのは当然のことで、誰が対応しても同じことです。地元にとっては、従来聞いたことのない言説や突拍子もない表現が沢山ある、あるいは従前定説とは違う、と思うことがあるかもしれないが、そのようなことから、その部分は一つの切り口・仮説、新しい見解として書いたものだということをご理解願います。その上で中身に対する反論・批評は大いに結構ですが、それはご自身の中でご自身の新たな研究のヒント・研鑽の引き金にして欲しい。賢明な頭脳明晰の自負をご自身のさらなる向上に当てて欲しい。なぜならば、T-FMOは学者ではなくズブの素人だからです。これが一定の限界です。なお、客観的な事実に基づく間違いの指摘や建設的なご意見は大歓迎でございます。

このレベルを以って本件はここで閉じることにしています。

以上が全部をまとめて事実在即した真相です。 たかが、一つの山道のことですが！

時代を越えて・将来において、本通りに深い興味・関心を抱く人達が必ずや表れることでしょう、その時に本書が、新たな発展的創造の基点・基礎になれば幸いであり、活用されることを期待するものであります。

締め括りに御礼の言葉です。本調査活動を見守って下さった、また支援を賜った「大黒森プロジェクト」の関係者、本道寺・月岡集落の皆様、本道寺地区会長に対し、そして、西川町役場の関係者、イベント集会に参加された皆様、「高清水通り」に足をお運び下さった皆様に対して心より多大なる感謝を申し上げます。ありがとうございました。

情報発信（公開・共有化・周知）コンテンツ

		高清水通り	
公表・公開		2023(令和 5)年 3 月 12 日(日) 於西川町交流センター「あいべ」	
調査報告書		ダイジェスト版（本書）	
西川町 HP トップ 『西川町デジタルマップ』		3 部構成で掲載 2023(R5)/9/26(火);初回掲載 2024(R6)/2/6(火);更新	
インターネット		「YBC ニュース 石橋」で検索（放送済）	
調査報告書を 随時更新	大沼開設の ホームページに掲載	URL ; 「 https://www.dreamyok.com/ 」 (URL 検索窓に dreamyok.com でも ok)	
	大沼開設の Facebook に投稿	QRコード  QRコード	カメラを当てると 「 dreamyok.com」 と表示される ・ Facebook アカウントの 設定が必要 ・ プロフィール写真は 白衣着用姿  検索窓に「@大沼香」

高清水通り調査隊

月山9合目付近で未知の石橋発見！発見者は70代トリオ！！謎に包まれた石橋の正体とはー

2023.11.07 15:47



keyword「YBC ニュース 石橋」

2023 年 11 月 7 日 15:47

2023（令和5）年 12 月末日

ディー エフ モ
(T - FMO)

布施範行 (F) ; TEL 090-4884-5794

宮林良幸 (M) ; TEL 090-2790-9222

大沼 香 (O) ; TEL 080-3338-3738 (著作・文責)

「個人利用で出典根拠（本書）を明記すれば、いかなる部分も使用（コピペ）可
また、SNS等での拡散・共有化は大いに推奨
ただし、金儲け（販売書籍等の営業）に資するものはNG

- ・唐突な言い回しや仮想的な事柄に気付くだろうが、それらの理由・背景については、別の調査報告書（作業中）に記述する。
- ・図表の一つひとつの細部説明は省略することからは、おかしな処に気付いた場合や、その解釈は、賢明・頭脳明晰なる読み手の想像にお任せする。見解の異なる処は、読み手のご見識を以ってご自身のさらなる向上に当てて欲しい
- ・本書は専門的学問的研究の書ではなく、あくまでも、現地に幾度となく足を運び、現物と幾度となく対面した上での素人の考察である。